

第52回労働リーダーシップコース開催報告

金属労協組織総務局部長 上口 智子

2021年10月14日から30日まで、京都・関西セミナーハウスにおいて、第52回労働リーダーシップコースを開催した。

昨年は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い延期となったため、2年ぶりの開催となった。

4本の柱に基づく全人格的教育をめざし、17名の受講生が研鑽に励んだ。以下、所感も交えながら報告する。

再スタート―2年振りの開催

2020年10月、第1回の開催から一度も途絶えることなかった51年の歴史が途絶えた。「人間の教育は単なる区々たる弁舌や机上の空論でできるものではなく、寝食を共にした共同の生活でなされるものである」。これは初代校長の故竹中正夫先生が西日本労働リーダーシップコース（現労働リーダーシップコース）20周年記念誌に記された言葉である。Webでの開催や期間短縮など様々な可能性を検討する中、最終的にはこの「寝食を共にした」という労働リーダーシップコースの原点に立ち返り、断腸の思いで延期を決断した。そして2021年、感染状況も落ち着いて10月、感染防止対策を徹底したうえで再開を果たした。奇しくも第1回の受講生と同じ17名が関西セ

ミナーハウスに集い、労働リーダーシップコースの新たな歴史が再びスタートした。

開校式

2021年10月14日（木）10時から開校式を行った。篠笛（森田玲・玲月流初代）の奏楽で始まり、式辞として香川孝三校長（神戸大学名誉教授）



開校式で決意表明を読み上げる受講生代表

植木朝子名誉校長（同志社大学学長）が、コースの意義を述べるとともに、受講生を激励した。また主催者代表挨拶として金子晃浩金属労協議長が挨拶に立ち、「24時間すべてが学びの場面である。コロナ禍ということで制約も多いが、工夫をしながら十分にコミュニケーションをとっていただきたい。一生の仲間となる17名が集った偶然性、皆さんと出会えた幸運、この場にいられる貴重さなどかみしめながら、研修に励んでいただきたい」と述べた。東京からWebで対応いただいた来賓の厚生労働省・鈴木英二郎政策統括官は「労働組合活動が積極的に評価されることが重要だと考える。労働リーダーシップコースに参加される皆さんが、知識を活かし、労働界のけん引役として力を発揮されることを祈念します」と激励された。次に関西

ブロック・嶋本貴至代表が、続いて石田光男副校長（同志社大学名誉教授）が挨拶に立ち受講生を激励した。最後に受講生を代表して三菱重工グループ労連本社・横浜地区本部執行委員の名久井美麗さんが受講生宣誓を行い、開校式を終了した。

日常生活

―徹底した感染対策

開催期間中、マスク着用・手指のこまめな消毒・食堂での黙食・抗原検査の実施・三密の回避・会議室の換気など、徹底した感染対策を行った。会場である関西セミナーハウス内の至る所に消毒液が置かれ、会議室内には大型の空気清浄機、フロントにはサーマルカメラが設置された。期間中、サーマルカメラによる体温チェックが日課となった。

このコースの目的のひとつである



今日も朝から散歩日和の良い天気。鷲森神社にて。



お茶室体験
一人ひとり先生から手ほどきを受け、お茶を点てました。



講義風景(統計学)
皆、Excelの操作に必死です。

受講生間の交流でも感染対策は重要な課題だった。毎回大盛り上がりでの交流会をいかにして実施するか、実行委員会に委ねられた。実行委員会では、「できる限り「密」を避け、しかし思い出に残る楽しいひと時を味わえる交流会を実施するにはどうしたらよいか、何度も何度も話し合いを重ねた。結果、今までの交流会に引けを取らない、大切な思い出のひとつとなった。

特別プログラム

座学が主な講義の他にも様々な特別プログラムがある。

結論を求めず自由に討論する場である「討論会」と金属労協三役と語り合う「特別討論会」では、「働き方の変化」「組合役員の選出と育成」「ユニノーマルにおける組合活動」な

ど日頃組合で抱えている課題について討議した。京都の自然に学ぶオープンプログラムでは「比叡山登山」に挑戦した。また日本の文化に触れる「坐禅」や「お茶室」を体験。お茶室体験では17名という人数だったからこそ、一人ひとりお茶を点てるといふ貴重な経験ができた。本稿では以上の特別プログラムの中から、ゼミナールについて紹介する。

ゼミナール

―労働組合の役割とは？

ゼミナールでは「時代の求める労働組合の役割」を総合テーマに、労働組合・職場の課題を担当講師指導のもと、受講生同士で解決案を探索する。5つのテーマに分かれて4回にわたり討議を重ねた。最後にはゼミナールごとにパワーポイントを使っ

て発表を行い、成果を共有しあった。各ゼミナールのテーマと討議概要は次のとおり。

◎香川ゼミ

指導：香川孝三(神戸大学名誉教授)

『労働組合と国際』～21世紀国際社会における労働組合の役割

国内・外において貿易摩擦や南北問題など様々な問題が発生しており、とりわけ新型コロナウイルス感染拡大が大きな問題となっている。そのように混沌とした世界情勢の中で、時代に合わせた経営・従業員の働き方とは、そして組合としてどのようなチェックとフォローが必要なのかを分析。アフターコロナへフェーズが移行する中、労使共通の課題として予測される内容を重点課題ととらえ、テーマを①テレワークの推進、②外国人労働者問題、の2点に絞り込み、

討議を重ねた。

◎石田ゼミ

指導：石田光男(同志社大学名誉教授)

『労働組合と職場』～働き方と雇用

働き方改革の時代における労組の役割と課題について各企業の実態を共有し、人口予測や正規・非正規雇用者数の推移など統計データから時代背景についても分析した。「職場からの新たな雇用関係の構築」をテーマに、雇用関係のあるべき姿を模索するとともに、会社、組合員、労組が取り組むべき課題について、討議した。

◎中田ゼミ

指導：中田喜文(同志社大学大学院教授)

『労働組合と社会』～仕事と処遇

納得性のある賃金水準

日本の賃金水準は主要先進国の中で最下位と言われる中、各社の賃金制度を比較分析しながら、賃金の構成や賃金決定の要素、賃金水準のあり方など討議した。また、業績指標、労働生産性、労働分配率などについて分析、今後の方向性などについても併せて討議した。

◎上田ゼミ

指導：上田眞士(同志社大学教授)

『労働組合と企業』～職場と会社にとつての労働組合の存在意義

企業が直面している課題を抽出するとともに、労働組合の課題の洗い



特別討論会の後、金属労協三役と記念撮影

の取り組みや歴史的取り組みの経過を分析。また、「仕事」「ころ」「残業」「風土」の4つのキーワードからワーク・ライフ・バランスが実現できない原因と対策について討議した。

閉校式―仲間との絆を胸に

2021年10月30日(土)朝から出発(たびだち)の集いを行い、受講生一人ひとりと、感想を述べ合った。感染対策のため例年よりも受講生間の交流に制限はあったが、苦勞した

出しを行った。①目まぐるしく変化
する会社事業変革に対する労働組合
の基本姿勢、②私たちの職場での組
合活動、の2点に絞って各社の事例
なども参考に討議した。

◎寺井ゼミ

指導：寺井基博(同志社大学准教授)

『労働組合と働き方』～ワーク・ライフ・バランスの実現

そもそも「ワーク・ライフ・バランスの実現」とはどういうことなのか、考えを整理するために長時間労働の是正や育休取得促進・女性活躍推進など実施している制度について各社

受講生代表の答辞では、第52回級長のJFEスチール京浜労組・久下保執行委員が研修期間中の思い出を語るとともに、「ここで出会った17名の仲間と強く結んだ一生モノの絆を大切に、明日からそれぞれの立場で自分が何をすべきかを考え、実行し、労働運動の創造に汗を流す決意です」と今後の決意を表明、「卒業の歌」を全員で合唱し、閉校式を終えた。

次回、第53回開催へ

幸いなことに、第52回コースは一人も感染者を出すことなく終了した。そして、労働リーダーシップコース(旧西日本)の修了生は通算1786名、旧東日本コース(第1～40回)の939名と合わせて、2725名と



本当に最後の記念撮影。2週間半、がんばりました。

なった。

次回、第53回コースは2022年10月13日(木)～29日(土)の日程で開催する。少なからず行動制限がある中、いかにして研修の質を落とさず
に実施するのか、課題は多い。しかし第52回の受講生が、コロナ禍での合宿研修のあり方を示してくれた。この経験を活かし、第53回を開催する。

実行委員会

各ゼミナールから班長各1名互選し、計5名で実行委員会を編成する。実行委員会の中から1名級長を互選する。コースは受講生の主体的な運営を基本とし、実行委員会がその中心となる。全体ミーティングで選出された第52回コースの実行委員会メンバーは次のとおり。

級長：下久保亮(JFEスチール京浜労組、香川ゼミ班長)

副級長：片瀬雅也

(パナソニックアプライアンス労組エアコン・コールドチェーン支部、石田ゼミ班長)

三樹俊介(オムロン労組、中田ゼミ班長)

稲葉允(シャープ労組、上田ゼミ班長)

田中翔(ダイハツ労組、寺井ゼミ班長)

※集合写真はマスクを外していますが、写真撮影の時のみマスクを外しています。

このコースで得た学びや仲間がかけがえのない宝物

第52回 労働リーダーシップコース級長
JFEスチール京浜労働組合執行委員

下久保 亮



2021年10月14日の朝、関西セミナーハウスに総勢17名の受講生参加のもと、「第52回労働リーダーシップコース」が開催されました。

セミナー初日を振り返ると、ピリッとした緊張感に包まれる中、開校式や各種プログラムが行われ、この雰囲気はいつまで続くのか…と感じていましたが、それもつかの間、その日の夜にはオリエンテーション等を通じて横のつながりが芽生え始めていました。

ただ一つ誤算だったこと、それは、私が級長を引き受けることになってしまったことです。

ひょんな出来事をきっかけに、その場の雰囲気と勢い任せで引き受けてしまったのですが、正直、自分が皆を牽引することができるのか…と、かなりプレッシャーを感じておりました。しかし、私と同じ香川ゼミのメンバーや各班長をはじめ、受講生全員が各種講義やイベントなど積極的に参加してくれたおかげで当初の不安も忘れ、むしろ誰よりも楽しく、17日間を過ごすことができましたと感じています。

私は級長を務めるにあたって常に意識し続けてきたことがあります。それは「全員とひざを交えて会話する。また、その環境づくりをする。」ことです。ゼミの活動や発表に向けた資料づくりを行いつつ、それと同時に私はこのセミナーで地域も産別も異なる者同士が集まる中、一人でも多く深い仲間づくりと、その雰囲気をつくるのが重要なことと考え、実践してきました。

セミナー以降もたまに集まる仲間ができたことを考えれば、実践してきたことは間違いではなかったことだと思います。

本セミナーに参加し、各種講義やゼミを通じて労働運動の基礎や次代の働き方や労働運動について学んできたことは、私自身をはじめ受講生全員の大きな糧になったことは言うまでもなく、この中で繋がりを持つことができた仲間は大きな財産だと感じています。

コロナ禍においても出来る方法を模索し、開催いただいた事務局や関西セミナーハウスのスタッフ等、関係者の皆さまに改めて御礼を申し上げます。

本当にありがとうございました！

第52回労働リーダーシップコースを振り返る



労働リーダーシップコース校長
神戸大学・大阪女学院大学名誉教授

香川 孝三 (かがわ こうぞう)

2020年の労働リーダーシップコースは新型コロナウイルスの影響で中止とせざるを得なかったため、2021年はぜひとも開催したいと思っていました。2年も開催しないということは避けたいという思いが強かったからです。新型コロナウイルスがどうなるか不安を感じていましたが、関係者の努力によって無事終えることができました。受講生の数を例年の半分ぐらいに減らし、受講生1人1部屋を実現することになりました。安心安全を感じていただけたのではないかと思います。受講生同志の交流は、皆様の工夫によって、例年と変わらず実施できたのではないかと思います。

ゼミ単位のコンパは中止、全体の打ち上げの懇親会も中止となりましたが、交流会だけはなんとかクラスターが発生しないように工夫しながら実施できました。肝心の授業やゼミはほとんどが対面で実施できました。ゼミには3～4名という少ない人数の参加でした。これでゼミができるのか不安がありましたが、受講生の皆様が盛り上げないといけないという気持ちで発奮していただいたおかげで頑張れました。また、他のゼミに参加している受講生とも例年以上に話をすることができたことは、思わぬ効果でした。受講生を何人程度にするのか、今後、金属労協の財政事情を考慮しながら、検討してもいいのかもしれません。関西セミナーハウスの宿泊施設に制限があるので、完全個室とするのはむずかしいかもしれませんが、それに近い環境が整備できればいいかもしれません。